「大阪大学ＣＯＥプログラムに参加して」（研修報告）

昨年度に引き続き、二〇〇四年八月九日から一一日の三日間、大阪大学でおこなわれた研修会について報告したい。これは、大阪大学が旅費・宿泊費などを負担し、全国の高校の歴史教員を対象におこなったものである。お得であるだけでなく、密度の濃い、非常に刺激的な勉強会・交流会であった。以下、その概要とその感動の一端をお知らせしたい。

一　開催の趣旨

この研修会は多額の予算が配当された「二一世紀ＣＯＥプログラム」のうち、大阪大学が実施している「インターフェイスの人文学」において取り組まれたものである。今回はモデル研究「世界システムと海域アジア交通」のうちの「第二回全国高等学校歴史教員研修会」であった。昨年度のモデル研究「シルクロードと世界史」に続くものである。

研修会のねらいは前回と同様、事項や年代の羅列ではなく「筋がある」「考え方がわかる」「像を結ぶ」歴史教育を高校レベルで実現するための材料を、最新の歴史学にもとづくが、過度に詳細でなくむしろ歴史学全体を見据えた巨視的な講義、それに対する質疑応答であった。今回のテーマは「アジア史と日本史の対話」であり、世界史・日本史両方の専門家が参加して、両方の視点と立場を出し合い刺激しあって、両方の歴史研究・教育の刷新に貢献しようというものであった。

二　会場および日程

会　場　大阪大学の図書館ホール

日　程

八月九日（月）

一二時二〇分から一六時四〇分まで講義。

桃木至朗（大阪大学大学院文学研究科教授）

イントロダクション

平　雅行（大阪大学大学院文学研究科教授）

「中世の神国思想と顕密体制論」

桃木至朗

「東南アジアにおける外来文明や「世界」との向き合い方―日本史との比較―」

八月一〇日（火）

九時一〇分より一〇時まで前日の質問への回答、受講者とのフリートーキング。（これがすばらしい！講師の先生方が徹夜に近いかたちで質問用紙に目を通し、真摯に回答してくれるのである！）

一〇時一〇分から一六時四〇分まで講義。新しい刺激の連続で、許容量をオーバーし始めた頭がしびれてくる。快感（か・い・か・ん）。

森安孝夫（大阪大学大学院文学研究科教授）

「中央ユーラシアから見た世界史」

山内晋次（大阪大学ＣＯＥ特任助手）

「古代・中世の日本列島と海域世界」

岡本弘道（大阪樟蔭女子大学非常勤講師）

「琉球王国と東アジア国際秩序」
杉山清彦（大阪大学大学院文学研究科助手）
「近世東北アジアと日本列島」

八月一一日（水）

九時一〇分より一〇時三〇分まで前日の質問への回答、受講者とのフリートーキング。昨日よりも時間を延長していただいた。

一〇時四〇分から一二時二〇分まで講義。　最後まで刺激的な内容が続く。

秋田　茂（大阪大学大学院文学研究科教授）
「世界システム・アジア交易圏と近代日本」

一四時から一六時まで全体討論会。最後まで質問が絶えない。何人も手を挙げたまま、残念ながら時間切れとなる。

そして閉会。

アンケートや質問事項を何人もぎりぎりまで書き続ける。電車の時刻を気にしながら交流を深める人たち。個人的に質問に行く人、最後まで懇切丁寧に応対してくれる講師の先生方。感動の内に幕を閉じた。

三　受講者

世界史・日本史の高校教員に加え、予備校教員、教科書編集者など七五名が参加した。北海道から鹿児島まで二三都道府県にわたり、前回の岩手から福岡までの二〇都府県より参加者の幅が広がった。前回参加者からも多くの参加希望が寄せられたが、なるべく多くの地域の、多数の先生方の参加を優先し、今回は連続参加が認められなかった。

受講者には三日間すべてのプログラムに出席することを原則とし、研修会後、約一週間以内に千字程度のレポート提出が課された。

神奈川県からは大島弘尚（栄光学園）、木村芳幸（柏陽）、小林克則（厚木商業）、小林克史（秦野南が丘）、渡辺悠也（桐蔭学園）、が参加した。

事後には報告書が送付される。質疑応答・意見などが的確にまとめられており、参加者たちの熱意が伝わる。

四　主催者より

討論時間の設定など盛大な賛辞の一方、成果をすぐに授業に応用することは難しいとの意見も出された。大学としても高校教員から寄せられた問題点を分析し、溝を埋めていかねばならない。この試みがすべての高校・大学に、そして社会全体に波及するには長い年月がかかるだろうが、幸いにも多くの高校教員がわれわれの試みを支持してくれている。本ＣＯＥプロジェクトが続くかぎり、変革のうねりをおこし続けるべく、本研修会を継続して開催したい。

五　お知らせ

二〇〇五年度、第三回研修会の開催。

日　程　八月九日から一一日の三日間。

詳細は大阪大学東洋史研究科ホームページを参照。

（文責　秦野南が丘高校　小林克史）